

多職種連携教育に向けたワークショップの試み

——「教育支援人材って何？」をめぐる討論——

加 瀬 進*

特別ニーズ教育分野

(2014年9月30日受理)

1. 問題の所在

筆者は平成25年度後半から、困難な状況に置かれている子どもを支援する専門職のチームワーク力向上に向けた、多職種連携教育の為の大学における授業案、カリキュラムづくり目指し、自主ゼミ（通称“つなプロ”）ⁱを展開してきた。この自主ゼミの趣旨は次の三点に整理することができる。第一に、主に学校教育において子どもを支援する人材、即ち教師・養護教諭・特別支援教育コーディネーター・スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー等を目差す学生諸君が、養成段階から共に学びあう場を創造すること。第二に、その目標とするところは、柔軟な学生の時期から、お互いの専門性・価値観・方法論等の違いを知り、その上で協働する専門職連携のためのマインドを形成し、具体的な知識・技能を獲得すること。第三に、その取り組みを自主ゼミから大学カリキュラムに位置づける手立てを検討し、大学当局と協働して実現すること。この三点である。

この着想の背景には二つの大きな反省がある。一つは「福祉と教育のコラボレーション」を謳っていくつかのアクションを起こしてきたにも関わらずⁱⁱ、ホームグラウンドである大学教育の場で自ら実践してこなかったこと。今一つがそのことに気づかせてくれた「難病の子ども支援全国ネットワーク」が主宰する「サマーキャンプがんばれ共和国in沖縄2012」への参加である。その際には社会福祉士を目指す学生だけを引率していたが、医療的ケアの必要な子ども達と海に入り、ご家族と深く交流する中で、「特別支援教育、養護教育、小学校や中学校教育を目指す学生も率いて

いたら、もっと互いの学びが深まった筈だったのに…」と激しく後悔したのであった。

さらに、本学の場合、この点に密接に関わる動きが二つ存在した。一つがHATOプロジェクトⁱⁱⁱの一貫として東京学芸大学が進めている「教育支援人材養成プロジェクト^{iv}」であり、今一つが平成27年度に向けた本学の学部改組である。前者の課題意識は「学校教育を、学校や教員を独立させて考えるのではなく、学校の内外に広がる教育資源を総じて活用し、学校・家庭・地域教育との連携の中で再構築していくことが求められている」というものであり、「教育支援人材」のありようを追求しつつ、その養成に資する研究を展開しようとするものである。そして、後者～本学の学部改組～は、こうした問題意識に呼応しつつ、現行の教育系を「学校教育系」、教養系を「教育支援系」とし、とりわけ後者は従来の5課程16専攻を「教育支援課程・教育支援専攻」という1課程1専攻に改め、その専攻内にソーシャルワークコース、カウンセリングコース等7コースを置き、教師と協働する「教育支援人材」養成を行うというものである。

筆者は、現在の学校教育において子ども達が置かれている厳しい状況を目の当たりにする中で、こうした取組や改革案を強く支持するものである。と同時に、「教育支援人材」とは何かという間に明確に答える責務がある、という立場に自覚的に立とうとしている。

そこで、「教育支援人材とは何か」というテーマを設定し、そこに多職種連携教育の方法論開発をサブテーマにおきながら、ワークショップを開催した。本稿では、そのプロセス及びワークショップの実際と「教育支援人材」に関する議論のエッセンスを整理し

* 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

ておきたい。

2. 「教育支援人材」論の到達点

ところで「教育支援人材」について集中して議論したものの一つに日本教育大学協会編(2010)「教育支援人材」ハンドブックがある。この中で木原は、「教育支援人材」を「①学校教育や社会教育の様々な教育シーンにおいて、②子どもの「学び」を促進するために、③他者とのネットワークやパートナーシップを築きながら、④その力量(知識・アイデアや技術)を形成・発揮するとともに、⑤自らの成長を省察し、自己実現を遂げていく、という活動に従事する人材」と記している。これは次に紹介する本学「教育支援人材養成プロジェクト」リーダー松田恵示による「類型論」に比すれば、「機能論」的なないし教育支援人材の「主体論」的な定義の試みといえよう。一方、松田(2014)はまず、教育支援人材の専門性を「Specialty」的側面の高低×「Coordination」的側面の高低をクロスさて、①専門職としての教育支援人材(高×高)、②特別分野を持った教育支援人材(高×低)、③補助者としての教育支援人材(低×低)、④調整者としての教育支援人材(低×高)という4つの枠組みで捉えつつ、次のような類型論を提示した。

- A) 各種行政, 公民館, 図書館, 美術館, スポーツ施設, その他教育関連施設及び企業, ならびに塾, 教育関連NPO等において専門職員として雇用され, 地域や生涯にわたり, 学校と協働する教育支援人材
- B) カウンセラー, ソーシャル・ワーカー, アドバイザー等の特別分野を持ち, 常勤・非常勤雇用者として学校と協働する教育支援人材
- C) 情報支援員, 学習支援員, 学校支援地域本部における地域コーディネーター, 放課後子ども教室におけるコーディネーターなど, 常勤・非常勤雇用者として, 学校内にて児童・生徒の支援や学校教育活動を教員と協働して行う教育支援人材
- D) ゲスト・ティーチャー, 学習支援, 行事支援, 学校事務支援, 登下校見守り, 放課後活動スタッフなど, ボランティアとして地域から学校と協働する教育支援人材
- E) 教育支援者として職業的専門性を発揮できる, コーディネート(ネットワーク&マネージャー)と, 専門性(特別分野の専門性)の両面を持った教育支援人材

筆者としては、こうした明快な機能論や主体論あるいは類型論から迫る「教育支援人材」論に多くを学びつつも、今一つ大きな違和感を拭いきれないでいた。漠とした表現になるが、一言で表すならば、子どもの姿、「子ども支援」との関係がよく見えない、という違和感である。

この違和感は自主ゼミにおける次のような学び合いでいっそう強まったといってよい。貴重な学びの瞬間であったため、文字化して、「教育支援人材プロジェクト」の会議に提出した資料からの引用である。

加瀬WG/自主ゼミ〈つなプロ〉定例学習会の情景
- 「人間の尊厳」班から -

「つなプロ啓蒙班」「つなプロCafé準備班」「教育支援人材班」と並ぶ、小生がリーダーを務める学習班の、6月9日(月)17:50~の議論です。そもそも、この自主ゼミ(加瀬WG)の究極の願いは「子どもの最善の利益」の実現です。そこで、「子どもの権利条約」を読み直すことにしました。テキストは、かつて大変評判になった(1995年)、中学生女子、小口さんと福岡さんによる意識『子どもによる、子どものための、子どもの権利条約(小学館)』です。以下は、その日の、最後の到達点です。

特別支援教育専攻Kくん: いや~, 凄いつすね。ホントに中学生の意識ですか?…特に第三条の二項, 〈お父さんやお母さんやそれに代わる人, そのほか子どもに“しなきゃいけないこと”がある人, そんな人たち, み~んなが力を合わせて, ほくら子どもが幸せになるように, 護ったり, 育てたり, そのほかいろいろしてくれる。国はその人たちと協力して, ほくらを護るためにできることは全部してほしい〉, っていうところ, ここんところ, 先生が最近, 愚痴ってる…すみません…「教育支援人材」っていうか, 「子ども支援人材」のど真ん中, 剛速球・ストレートじゃないっすか?

加瀬: いや~~, ほんとだよ。僕もここは付箋, 貼ってきたんだ。

養護教育専攻Nさん: あの, この本で「子どもを“まもる”」って言うとき, 必ず「守る」っていう漢字じゃなくて, 養護教諭の「護」, にルビをふって「まもる」って使っているんですね。それで…ちょっと調べてみました。そしたら, 「守る」の方は「手の中に包み込んで, 放さない」という意味合いがあり, 「護る」の方は「そこにある何ものかが壊れな

いように、外から支える」っていう意味があるそうなんです。なんだか、そこにこだわって「護る」っていう漢字を使っているような気がしたんです。自分が養護専攻だからかもしれませんが…。

加瀬: …Nちゃん、それ、相当ステキな発言!!!…そっか、つまり、子どもの育ちを「護る」人々が親を含めて「子ども支援人材」で、学齢期の学校教育に限定したときに「教育支援人材」が定義できるかも…。え〜〜と、例えば、担任の先生が、クラスのA君の学びや育ちを「善意ではあるが、壊そうとしている」時に、「先生、違いますよっ!それじゃ、A君、苦しくなるだけだから」、ってセーブできる人、それが一つの典型的な子ども=教育支援人材、って考えればいいんだよね。

社会福祉専攻Mさん: うーん、でも、先生は悪くなくって、SSWとかが力がないとか、おうち的にいっばいっばいとかもありますよねえ。だから、福祉の側っていうか、そっちがだめな場合に、担任の先生から指摘されることも大事だと思いますけど…。

加瀬: お〜〜〜、それ、頂き!!!それが本当のWEコラボ、つまり福祉 Welfareと教育 Education、そして子どもをとりまく「私たち/WE」のコラボ、だよ。いや〜〜、いい感じだとおもう。

さて、以上のような検討経過の中で着想されたのが「教育支援人材って何?」をめぐる学生とソーシャル・ワーカーの語り合い、即ち以下に記すスペシャル・ワークショップである。開催日は2014年7月12日(土)。まずはその概要を記しておこう。

3. スペシャル・ワークショップ「教育支援人材って何?」の概要

教員採用試験前日等の理由から、学生の参加者数は2年生と大学院進学予定の4年生中心に合計9名、ゲスト3名、筆者を入れて12名のグループワークである。ゲストは本学として少なからずお力添えを頂いている、ベテランのソーシャルワーカーにお越し頂いた。

3. 1 当日のねらい、スケジュール、プレゼンテーションの準備、会場の設営

今回のワークショップは「教育支援人材」を定義すること自体はねらいにしていない。その前の段階として自主ゼミの中で異なる学年、専攻の学生と筆者の間で生じてきた化学反応としての到達点を提示し、学校

表1 参加学生一覧

氏名	性別	専攻	学年
M.I	女	社会福祉	2
T.A	男	社会福祉	2
S.M	女	社会福祉	2
N.K	女	社会福祉	2
M.T	女	社会福祉	3
N.K	女	生涯学習	4
S.K	女	小学校社会	4
H.K	男	特別支援教育	4
M.S	女	大学院特支	M2

現場を深く知るゲストとリラックスしたムードの中でおしゃべりをしつつ、新たな化学反応を引き出し(ワールドカフェ方式)、我々なりの「教育支援人材」論に向けた視点を広める・深めることをねらいとした。そのためのスケジュールは次の通りである。

〈スケジュール〉

90分2コマ続きの演習授業を想定したものとなっている。

- ◆14:30~たたき台のプレゼンテーション(「つなプロ」内WG〈理論〉班による)
- ◆14:45~〈ワールドカフェ〉方式のワークショップ(40分)×2セッション
(学生全員が半分ずつゲストT島&加瀬島,ゲストM&ゲストK島を必ずまわって、気楽にトークする。学生とゲスト間での化学反応を引き出す手立て)
- ◆16:15~休憩
- ◆16:30~まとめ
(4人の島長(加瀬及びゲスト)がキーワード中心に各島における議論を紹介して、それをホワイトボードに集約しつつ議論を展開。2グループの島長同士の化学反応を引き出す手立て)
- ◆17:15~終了

ここで重要なのが「たたき台のプレゼンテーション」である。これまでの自主ゼミ経験から、「共有体験や共有情報なしに、学生同士による議論は展開しない、深まらない」ことを痛感してきたからである。そこで、自主ゼミ内のWG(理論班)でもみ合い、当日直前の定例学習会で共有した到達点と疑問点をまず提示して、その後に〈ワールドカフェ〉方式のワークショップ(40分)×2セッションを展開した。

なお、ワールドカフェ方式とは何人かの会議での討論のやり方(ファシリテーション)の一形式で、与え

られたテーマについて各テーブルで数人がまず議論し、次にテーブルホスト以外は他のテーブルへ移動し、そのホストから前の議論のサマリーを聞いてからさらに議論を深め、これを何回か繰り返した後に、各テーブルホストがまとめの報告を全員にする方法である。参加者が少人数で自由に発言をしながら、他の人々の様々な意見にも耳を傾ける機会を増やすやり方、とされている。

ワールドカフェ冒頭のプレゼンテーション資料から、ポイントとなる論点を示しておこう。

■親、それに代わる人、子どもに「しなくちゃならないこと」のある人全員が子ども支援人材であり、そのうち学校教育の中で、教師と協働して直接的・継続的・計画的・意図的に子どもを支援する人材が「教育支援人材」ではないか？

- 学校という場で担任をパイプとして支援していく人材？
- 担任に関わらず、学校教育の場と連携して支援する人材？
- 教員と生徒の双方向に働きかける支援をしていく人材？
- 子どもが身近に感じる、教育とつながりを持つ人材？

以上をたたき台として各島の議論を開始した。

なお、会場は定例学習会で活用している本学ゲストハウス「小金井クラブ」のホールおよび研修室を借用した。通常の教室とは異なり、同ホールは残響が大きいため、二部屋に別れたが、講義棟の可動式机・60名定員程度の教室であれば、1グループ6～7名で、最大4グループまでは同時進行可能と思われる。

3. 2 「まとめ」の議論～島長同士の意見交換を経た到達点

ワールドカフェおよび「まとめ」の議論を通して、参加学生がどのような気づき、学びをしていったか～学年や専攻等による違い、多専攻の学生同士の触発等についての分析はできていない。この点については、これまでの自主ゼミ参加者の個人別ファイル等を踏まえてさらなる分析を期すことし、ここでは当日の到達点を筆者なりに整理してみようと思う。

(1) 理念としての「教育支援」の捉え方

異口同音に議論されたのが、そもそも「教育支援人材」と言う場合の「教育」と「支援」をどのように捉

えるかによって、「教育支援」や「教育支援人材」の論点や定義が異なってくるのではないかと、という点である。

当日のゲストがスクールソーシャルワーカーないしスクールカウンセラーとして豊富な経験をお持ちであったということも作用したと思われるが、今日の学校教育と社会福祉の子ども観の違いが浮き彫りにされたといえる。つまり「教育」を〈臣民としての児童・生徒を指導する〉営為と捉えるのか、〈子どもの力を引きだす（ラテン語／*educare*）〉営為と捉えるのか。「支援」を〈臣民としての児童・生徒に対する教育指導を支える〉営為と捉えるのか、〈子どもの最善の利益を実現する〉営為と捉えるのか。この基本的スタンスに呼応して、「教育支援」～おそらく理念にあたる部分～の意味合いが決定的に異なってくるはず、という立論の仕方である。

今、この立論に対する明確な解答があるわけではないが、社会福祉サイドに立脚した「教育支援」論は、「子どもの最善の利益のために、子どもの力を引き出す」統合的・総合的営為と捉えたい、というのがワークショップ当日の、おそらく全員に共通の願いであったと思われる。

(2) 「教育支援」をめぐる構造的・階層的把握の必要性

一方、議論の中で気づかされたのが、理念としての「教育支援」ないし「教育支援人材」と、職種としての「教育支援人材」やシステムとしての「教育支援人材養成」とはひとまず分けて議論する必要がある、という点である。というのも、理念としての「教育支援」を広くとれば、それに対応する「教育支援人材」は限りなく広がる（家庭教育・社会教育等も含まれるから）。しかしながら、一方で、東京学芸大学という養成システムが学生や地域住民に対して責任をもって提供しうる（必要十分な給与を得ることを想定できる／社会的に承認される活躍の場がある等）「教育支援人材」は現実的に限定せざるを得ない。

自主ゼミのメンバーも、お越し頂いたゲストも、ワークショップ全体を通じて感じていた「もやもや感」は、こうした議論の枠組みが未整理であったことから生じた、議論の焦点のぼやけであったと気づき、改めて理念としての「教育支援人材」と、現実の養成対象としての「教育支援人材」を分けて、その上で構造的・階層的に捉える必要性が共有された。議論のたたき台として提起した「子ども支援人材」と「教育支援人材」という捉え方はその意味で止揚されたのではないかと、筆者個人としては感じているところである。

(3) 具体的な教育支援人材を捉えるための、もう一つの視点—子どものライフステージ

「はじめに」でも述べたように、ワークショップ開催まで筆者が抱き続けてきた大きな違和感、即ち「職種論はあっても、子どもの姿、「子ども支援」との関係がよく見えない」理由の一つとして、「子どものライフステージ」に応じた「教育支援人材」論を理念の面でも、現実の養成対象としても議論してこなかったことがあげられるのではないかと、いう気づきを得ることができた。

社会福祉の領域では、学校の授業づくりで重視される「学習指導案（題材観・本時のねらい・授業の展開・評価の観点等々）」とは異なり、子どもを真ん中に置いた「エコマップ」が用いられることが多い。このエコマップによって例えば教育職員と教育支援人材を書き表そうとすれば、対象となる子どもが幼小中高のどのステージいるのか、就学中か、移行期かによって、関わる教師の種類、教育支援人材の種類は当然、異なってくる。専門性や求められるコーディネート力のクロスマップで捉える教育支援人材に加えて、この「子どものライフステージ」という視点を入れることで、「教育支援人材」を立体的に議論することができるのではないかと、いう発見があったと言えよう。

(4) 教育職員と教育支援人材の相互理解におけるポイント

ところで、「教育支援は、子どもの最善の利益のために、子どもの力を引き出す統合的・総合的営為である」と捉えた場合、教員養成とソーシャルワーカー養成の間にある、根本的な差異に目を向けざるを得ず、ソーシャルワークの観点を学校教育現場にいかにも持ち込むか、相互の差異を認め合った上での協働システムをどのように構築するか、という議論なしに、「教育支援人材」論を展開しても机上の空論になる、という意見も少なからず出された。

まず、教員養成は「Solo Practice / 一人で一通りのことをこなすことができる」ことを目指して展開されるが、ソーシャルワーカー養成は「Networking / ニーズ（困っている状態）のアセスメント（発見と評価）とそれを充足する社会資源を探し、つなぎ、開発することができる」ことを目指して展開されるという根本的な違いがある。これは双方を大学教員として経験してきた筆者が痛烈に実感する点である。

またゲストの方々からも、子どもの評価が「教育では減点法」、「ソーシャルワークでは加点法」であり、関わり方も「教育ではトップ・ダウン」、「ソーシャル

ワークではボトム・アップ」であるといった実感が少なからず語られていた。問題はどちらが正しいかではなく、まさにそこに専門性の違いを見て、その違いを知り合い、子どものために協働していけるシステム構築（個人の努力に依存せずに済む公的な仕組みづくり）が同時に議論され、展開されなくてはならないのである。

なお、スクールソーシャルワーカーとしての仕事として、いかに「教師のメンタルケア」が増えているか、というリアリティもゲストから教えて頂いた点である。現実の学校現場では「先生の心のケア」をすることが、子どもの（学校生活における）支援に直結する、という点は十二分に視野に入れておきたい。このことが、即、「教育支援人材」論に直結するかどうかは議論の余地があるものの、重要な指摘と受け止めたところである。

4. おわりに

今回のスペシャル・ワークショップ「教育支援人材って何？」を通じた「教育支援人材」論、及び多職種連携教育プログラムの萌芽に関する報告は以上である。今回のワークショップを企画・運営した者としては、多様な専攻・学年の学生同士の学びあい、それを踏まえた現職者との学び合いは間違いなく、大きな問いに対する議論の起爆剤になる、という実感にあふれていた半日であった。しかしながら、前述したように、このワークショップに対するエビデンス・ベースドな評価は改めて行わなくてはならず、おそらく学生諸君の今回のレポートやこれまでの定例学習会における各学生の振り返りシート（個人別ファイルとして保管）を分析する必要があるだろう。後日を期したい。

文献

木原俊之（2010）1-3 定義-教育支援人材の概念と役割／類型、ボランティア概念との関係、日本教育大学協会編（2010）「教育支援人材」ハンドブック、41-47、書肆クラルテ
松田恵示（2014）「取り組み」の課題は何か、「教育支援人材育成推進シンポジウム」、2014年3月29日開催、当日資料

脚注

i 学生の命名によるものである。即ち「多様な専攻の学生がつながり、大学内外の多様な実践とつながり、〈子ども

- の最善の利益)を目差すつながりをさらに広めるための「つながるプロジェクト」,略して「つなプロ」。
- ii 例えば研究室ブログ,「WEコラボ!しませんか?加瀬研究室@東京学芸大学」を展開し,研究報告書や関連情報を提供しているのも,かかるアクションの一つである。
<http://www.we-collaboration.com/>
 - iii HATOプロジェクトとは大学間連携による教員養成の高度化支援システムの構築を期すものであり,北海道教育大学・東京学芸大学・愛知教育大学・大阪教育大学を中心に共同機構を設置して展開するものである。
 - iv 詳細は次のウェブページを参照されたい。<http://hato-project.jp/tgu/project/p1.html>

多職種連携教育に向けたワークショップの試み

——「教育支援人材って何？」をめぐる討論——

Report of A Trial Workshop for Inter-professional Education:

Discussion about “What is the Supporter for Education”

加 瀬 進*

Susumu KASE

特別ニーズ教育分野

Abstract

This report is the outline of workshop on the 12th, July, 2014, and the results of that discussion for the purpose of development an method for inter-professional education. The subject was “What is the Supporter for Education”. I tried to discover the trigger for “Inter-professional Education” in the discussion among the students of various course and school social worker or school counselor. The results are these.

- It's the fundamental question, “What is Education, What is Support”.
- We must understand the supporter for education as wide range in ideology, and real range in training at university.
- Life-stage of each children is a very important point of view.
- We must know and understand the difference of stance in the teacher training and social worker training.

Keywords: Inter-professional Education, Supporter for Education, Workshop

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本報告では、多職種連携教育のための方法論開発のために試みたワークショップ（2014年7月12日開催）の概要と議論の到達点を整理した。テーマは「教育支援人材とは何か」であり、多様な専攻の学生と現職のスクールソーシャルワーカーないしスクールカウンセラーの議論を通して、専門性の違う者同士の議論が生み出す化学反応をみようとした。その成果として、教育支援人材をめぐる次の視点を得た。

- 教育とは何か、支援とは何か、の捉え方が基本である。
- 理念としての教育支援人材は広く捉えながら、養成対象としての教育支援人材は現実的に捉える。
- 子どものライフステージという視点を導入する必要がある。
- 教員養成とソーシャルワーカー養成のスタンスの違いを知り、認め合う必要がある。

キーワード: 多職種連携教育, 教育支援人材, ワークショップ

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)